

縄文時代の髪飾

現代の櫛の主流は梳櫛すきぐしとよばれるもので、毛髪もうはつを整えて汚れをとるためのものです。しかし縄文時代の櫛くしはすべて挿櫛さしぐしとよばれる縦櫛たてぐしで、簪かんざしと同じように髪かみに挿して頭を飾るためのものでした。

縄文時代の縦櫛は10～20本の木の串くしを並べ、その上部を紐ひもで固定し、その上から粉と漆うるしを練り混ぜたもので塗り固めて形を作り、仕上げに上から赤漆あかうるしを塗って、強化と彩いろどりを加えています。

縄文集落の遺跡である御経塚遺跡から櫛は出土していませんが、御経塚遺跡から北西に約2キロの位置に広がる同時期の集落遺跡である中屋サワ遺跡（金沢市）からは美しい赤漆の櫛が出土しています。おそらく御経塚の集落でも使われていたことでしょう。

No image